



失語の失は失う、失語の語は言語の語、すなわち言語・言葉を失ってしまう症状です。「口がもつれる」「話がうまくできない」このような症状を聞いたことがあると思います。この時、口や舌の動きがわるくて会話がうまくいかないのか？それとも言葉そのものの理解や形成がうまくいかないために会話がうまくいかないのか？大きく違ってきます。脳に異常があると、言葉そのものの理解や形成がうまくいかず会話が成り立たないことがあります。これが失語症です。

人間の脳の大きな部分、読んで字のごとく大脳は左右に大きく二つに分かれています。右の大脳は左半身の大部分の機能をつかさどっています。左の大脳は右半身の大部分と言語の機能をつかさどっています。左利きの人の中には、たまに右の大脳に言葉の機能がありますが、ほとんどは左の大脳に言葉の機能があります。

脳卒中や脳腫瘍、頭部外傷など様々な原因によって、この左の大脳の言語中枢が障害されると失語症になります。失語症にはいくつか種類がありますがここでは大きく2つの失語症についてお話します。

一つ目は言葉を出す機能が失われる失語です。これは人が話している言葉を理解することはできるのですが、自分から正確な言葉をだすことができない状態です。

例えば「あなたのおうちはどこですか？」と尋ねると、

「あの、くる・・・、はい、・・・ですね」

質問の意味は分かりますが答えがうまく言葉になっていません。また、時計を見せて「これはなんですか？」とたずねると「らけい」と、音の一部を間違えることがあります。

二つ目は言葉を理解する機能が失われる失語です。こちらの言っていることが伝わらず、認知症になったのではないかと間違われることがあります。他の単語に置き換わったり、造語を作ったりします。例えば「あなたのおうちはどこですか？」と尋ねると、

「南のほうでね、おうちが、娘にやってきて、昨日は、ありました」

本人は質問がわかっていないことを自覚していないことがおおく、会話が成立しないまま押し問答になることがあります。また、時計を見せて「これは何ですか？」と尋ねると、「さかな」と他の言葉にいい代わることがあります。

言葉を出す機能は左の脳の前側に、言葉を理解する機能は左の脳の横側にあります。脳卒中や様々な疾患によって損傷すると、言語・言葉を失ってしまう失語が生じてしまいます。

認知症と間違われることがしばしばあります。会話が成立しないことがあれば失語症という症状を考えてみましょう。